

(yuk kor kanny) や魚の神 (cep kor kanny) 日本山の神や山姥などは、本格的な比較研究を待っている。北日本の日本海側に広く見られる鮭のオースケ・コースケの伝承なども、この関連で採り上げられるべきである。

最後に第三点として、〈動物の主〉を神観念の一つの祖型と見るべきだという主張に賛意を表しつつも、これがかつてシュミットの原始一神教説への批判という側面も持ったことを忘れてはなるまい。いずれにせよドグマ化を避け、具体的事例に即して〈動物の主〉の諸相をとらえてゆきたい。

古代北欧社会における血の復讐

——主としてサガを通して——

中里 巧

古代北欧社会における血の復讐は、いわば聖なる義務であった。本発表で掲げる古代とは、アイスランド古法『グラウガス』や一群のアイスランドサガの時代を指す。すなわち、およそ紀元後八〇〇年代から一三〇〇年代までの時代のことである。また北欧とは、主としてスカンジナビア地域言い換えれば古ノルド語から派生したスカンジナビア諸語を母国語とするアイスランド・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン地域のことである。したがって、フィン・ウルタイ言語を母国語とするフィンランド地域は含まれない。

古代北欧社会における血の復讐という伝統、すなわち、血の復讐を例外のない義務とする習俗は、古ノルド語の世界観や価値観に連なる有意味性体系の母胎と云うべき北方ゲルマン民族固有の習俗であった。言い換えれば、古代北欧地域において北方ゲルマン民族以外にサーミやイヌイットといった民族もまた見いだされるのであるが、サーミやイヌイットの説話や宗教習俗の中に血の復讐に類する事例が個別には実在する可能性がまったくないとは云えないにしても、少なくとも、北方ゲルマン民族が有していたほどこわだった慣習としてサーミやイヌイットが、血の復讐という理解を有していたことはなかった。

北方ゲルマン民族とサーミおよびイヌイットとの民族特性の相異も、興味深い論点である。なお本発表では射程が広大になり過ぎるため、述べるべきではないかもしれないが、アイヌはサーミおよびイヌイットと熊祭り儀礼やシャーマン儀礼といった宗教習俗において類縁関係にあり、宗教習俗を以てして社会制度の基層と考えるなら、北方ゲルマン民族とアイヌとの民族特性の相異についても議論可能である。サーミ・イヌイット・アイヌの宗教習俗や価値観がアニミズムを本質としており、彼らの世界観にはアニミズムに対する著しい葛藤や矛盾が本来見られない。これに対して、北方ゲルマン民族においてはアニミズムに対する著しい葛藤や矛盾が垣間見られる。『古エッダ』や『スノリのエッダ』に散見される絶滅神話は、神々と巨人なしいは人間と自然との底知れぬ葛藤と矛盾の産物である。こうしたアニミズムないし自然との葛藤や矛盾という古代北方ゲルマン社会の根底に響いて止まない重奏低音のひとつのシンボル

第13部会

として、血の復讐を理解することができるのである。

血の復讐とは、家族間の抗争において繰り広げられる死闘のことである。自分の家族の誰かが他の家族に殺されたばあい、必ず他の家族を殺すべく復讐を果たさなければならない。これに例外規定はない。したがって血の復讐は、聖なる義務なのである。血の復讐を果たさないかぎり、自分の家族は祖先も含めて損なわれた名誉を回復できない。名誉を回復できないということ、これ自体が祖先も含めて家族全員が地獄に堕ちることを意味していた。古代北欧人にとって家族の連帯が醸し出す安らぎや幸福こそが彼らの平和の証であり、他人による家族の殺害は、平和の破壊であった。血の復讐は、聖なる義務であるゆえに、復讐の連鎖を産み出し、無際限に続くことになる。北方ゲルマン民族が血の復讐や殺害を好む野蛮な民族であったというのは誤解である。殺害は、忌み嫌われていたし、『グレートイルのサガ』などからも容易にわかるように、温厚で争いを好まない人物が、古代北欧社会では尊敬されていた。血の復讐は、古代北欧人にとって実人生の苛酷さを示唆する絶好のモチーフであった。血の復讐を果たす者は英雄であり、英雄のみが葛藤や矛盾を超越することができるのであった。また古代北欧人にとって究極のエートスは美であり、英雄は美の体現者でもあった。本発表では、アイスランドサガのうち『ニヤールのサガ』をとおして血の復讐の内実を検討する。

一九世紀神話学とチエンバレン

平藤 喜久子

幕末の開国を機に、日本文化は海外に広く紹介されるようになった。古事記も例外ではなく、多くの外国人たちに注目され、翻訳や研究もはじまった。とくに高名な日本学者であったチエンバレンによる翻訳は、後世の日本学にも大きな影響を与えることになった。

チエンバレンが日本神話を翻訳した時代は、マックス・ミュラーやタイラーなどが活躍する神話学の草創期でもあり、実際にチエンバレンは彼ら神話学者とも交流を持っていたことがわかっていく。そのような状況から、チエンバレンの翻訳の背景には、彼ら神話学者たちの影響もあったのではないかと考えられる。

そこで本発表では、マックス・ミュラー、タイラーとの間で交わされた書簡資料などを参考に、チエンバレンの古事記翻訳を一九世紀の神話学の文脈から考察することとした。

チエンバレンの古事記は、ほぼ直訳であり、彼も「素朴な文法」を心がけたと述べているように、解釈をなるべく交えない訳をしている。その解釈や訓読にあたっては本居宣長を高く評価し、それに習う形で翻訳を行っている。また、彼が猥褻だと感じた場面は、ラテン語で記すなど、一九世紀ビクトリア調の道徳意識の反映も読み取ることができる。